

手首を縛ったり、お尻を叩いたりするのは、晴彦と二人きりだからこそ楽しいSMごっこだ。晴彦が好きな気持ちをつつそう高め、信頼を培うすばらしい行為だった。なのに、二人だけの秘密の世界に妹が入りこむというのである。

「じゃあさ、二人でチン×ンを舐めてくれるかな……」

晴彦は、くすぐったそうに笑いながら、ズボンのファスナーを引きおろし、男根を取りだした。まだ一度も射精してない晴彦の陽根はギンギンにふくれあがり、凶暴に反りかえっている。

「ふ、二人で、フェラチオ？」

「そうだよ。それが終わったら、優芽ちゃんはアナルセックス、朋香さんは膣でセックスだよ」

「えっ？」

「や、やだっ」

二人が交互に声をつまらせた。

優芽は処女破瓜の苦痛がおさまり、セックスのよさをわかるようになった頃だから、普通にセックスしてもらえんことを望んでいた。

朋香は、アナルセックスでは快感を覚えたものの、まだ膣での絶頂は覚えていない。

いじわるなご主人様は、二人の姉妹の未開発なところを、あえて味わうというのである。

「ハル、手首、ほどいてよ」

「だめだよ。ハンデをつけなきゃ。朋香さんのほうが年上なんだから。それに朋香さんってすぐに殴るしね」

「お兄ちゃん。私は殴らないわよ。私はOKよ。お兄ちゃんが気持ちのいいこと、私がしてあげる」

「わ、私もOKよ！」

「じゃあ、二人でフェラをやってくれ」

晴彦は示威するように、手のひらで勃起した男根をこすった。朋香の唾液にまみれた男根は、隆々と反りかえって、鬼の角のようにそそり立っている。

下着姿で微乳をモロ出しにした十四歳の優芽と、罪人のように手首を背中で結ばれながら、セーラー服をめくりあげてEカップの巨乳をあらわにした朋香。二人の姉妹が、晴彦のペニスの下ににじり寄った。

手が使えない朋香は、せいいっぱいに首を差し伸べ、勃起したペニスを舐める。ペニスは不規則にピコピコ動き、鼻先や頬をつつく。

優芽は、男根の根元に細い指を絡め、いたずらっ子のような男根の動きをとめると、反対側からぺろっと舐めた。

「きゃっ」

朋香は、晴彦のペニスの味よりも、妹と舌が触れ合ったことのほうに衝撃を受けていた。びっくりして目を見張るが、優芽はうっとり目を閉じて無心に舌を動かしている。

「んっんっ、ああ、お兄ちゃんのおチン×ン、おいしい……はあう、ちゅぱっ……むっ、うっ」

妹の積極性に煽られて、朋香もおずおずと舌をつかいはじめた。

「あんっ。ふうっ……お、おいしっ、ハルのオチン×ン、スゴオイ……」

妹に負けじと声を出すと、ペニスがおいしいごちそうのように唾液が湧きでて、顎を伝って流れだす。

すでに一度、ローターでエクスタシーを覚えているために、興奮するスピードは速かった。

晴彦は美人姉妹二人が競うようにペニスを舐め合っている様子を見ると、亀頭を指先で持ちあげながら腰を引いた。



「きゃっ」

「やだっ」

二人の喉から甘い悲鳴があがった。陽根を舐めようとした舌が、もろにぶつかり合ったからである。

妹の舌はとろけそうなほどに熱くやわらかく、いけない魅力に満ちていた。

「そのまま二人でキスしてみろよ」

「えっ、い、いやよ、そんなのっ。優芽ちゃんは妹なのよ」

「キスすればいいのね？ お兄ちゃん」

優芽は驚いてあとずさる朋香の後頭部を持つと、自分から唇を重ねた。

「や、やめてっ。ゆ、優芽ちゃんっ」

フェラチオのときに、優芽の舌がときおり触れるのとは全然違う。朋香は顔を振って逃れようと必死だが、ローターで絶頂を極めて疲れきっているうえに、後ろ手縛りにされて行動の自由を奪われている。逃げられるわけがなかった。

「んっ、んんっ、や、やめて、ゆ、優芽ちゃ、ん、うっんっ」

「あああっ……んっんっ」

優芽は、姉の後頭部を抱きしめ、乳房をすりつけるようにキスを深く重ねていく。